

トランプ大統領が、令和初の国賓として来日した。今回は横田基地から進入したが、今回は公式に羽田空港から入国した。ゴルフに興じ、相撲を見て、炬燵焼きを堪能、両国では土俵に上がり大統領杯まで授与した。実業家時代、プロレスのリングにも上がり、かの有名なビンスマクマホン氏と場外乱闘まで繰り広げた辣腕プロモーターにとつて、スモウレスリングは退屈だったに違いない。

私の世代、相撲と言えは「歳前」だ。敗戦・占領統治後、昭和の相撲の歴史は歳前にある。元々国技館は両国にあったが、昭和20年3月10日の両国近辺の写真を是非調べて見てほしい。ペンペン草も生えない！とはこのことだ。

この日一日で、10万人の市民が卑劣な空爆により惨殺され、街は焦土と化した。両国の土俵で満面の笑みを浮かべる大統領を見た時、私にはその無残な写真が思い浮かんだまま、敗北感を禁じ得なかった。

一方、都心では右翼団体の街宣車も見られたが、「Welcome to Japan」と星条旗入りの横断幕を掲げた街宣車も登場した。核兵器を使用され、大量虐殺され、国体を変容させられても、親米な右翼が存在することは、一般市民には衝撃だろうが、実は今に始まったことでもない。

米国のセレブやメディアは彼を毛嫌いする。日本人もほぼそのプロパガンダを信じて、あまりいい印象を持っていないが、メディアも市民も歓迎ムードだ。

彼は、アメリカ経済にとつて史上最高の大統領だ。グローバル経済より国益を重視

Welcome to Japan

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

するクレバーな首脳であるが、物言いが独善的で、強権的手法に嫌悪感を持つ米国民メディアがメンツのために足を引っ張っている。

米国民メディアは、アメリカファーストよりグローバル経済を優先したいのだ。国内はもとより、外遊先でも変わらない、コンボイのように威容な大統領車列、ビースト（専用車）の車窓が群衆の前で開かれることはあまりない。

ロンドンでは市長自ら反トランプを煽り、擲楯中傷する巨大バルーンまで登場した。車窓を全開したくなる唯一の国が「Japan」なのだ。

「ようこそ！日本へ」日本人は寛容だ。しかし、史実の検証と、国際社会の現実には背を向けている。アメリカに従うフリをするのは大切だが、トップが代われれば約束は反故にされる。その準備と警戒は決して怠ってはならない。

「スーパードラッグ」[「レクサス冤罪」]「T P P 外圧」……。アメリカに振り回され、全面服従し国益を損なった、つい最近の現実をもう忘れてしまったのか？

中国より痛い目にあいながら、アメリカを信じ、丸ごと受け入れてしまう。

なんでも「Welcome」という関係は、決して、いいトモダチではない。

「NO!」と言えずに、利用された拳句、孤立を招くトモダチ関係は、中学生でも経験している。



Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に「概説戦後学校教育」「武徳教育のすすめ」。



美楽での連載を束ねた百念撰集
「雲涯蒼天」
定価700円
Amazonにて販売中